つくも神の星祭り

１００年間大切に使われた道具には魂が宿り、「つくも神」になるといわれています。

つくも神たちは、山の奥深くの村で静かに暮らしていました。

今日は７月７日、七夕の日。

つくも神の村ではこの日、年に一度の 「星祭り」 が行われます。

天の川から村を流れる　「つくも川」　にお星さまが降ってきて、

つくも神はその中から 一つだけお星様を持って帰ることができるのです。

そして、一つだけ願いをかなえてもらうことができます。

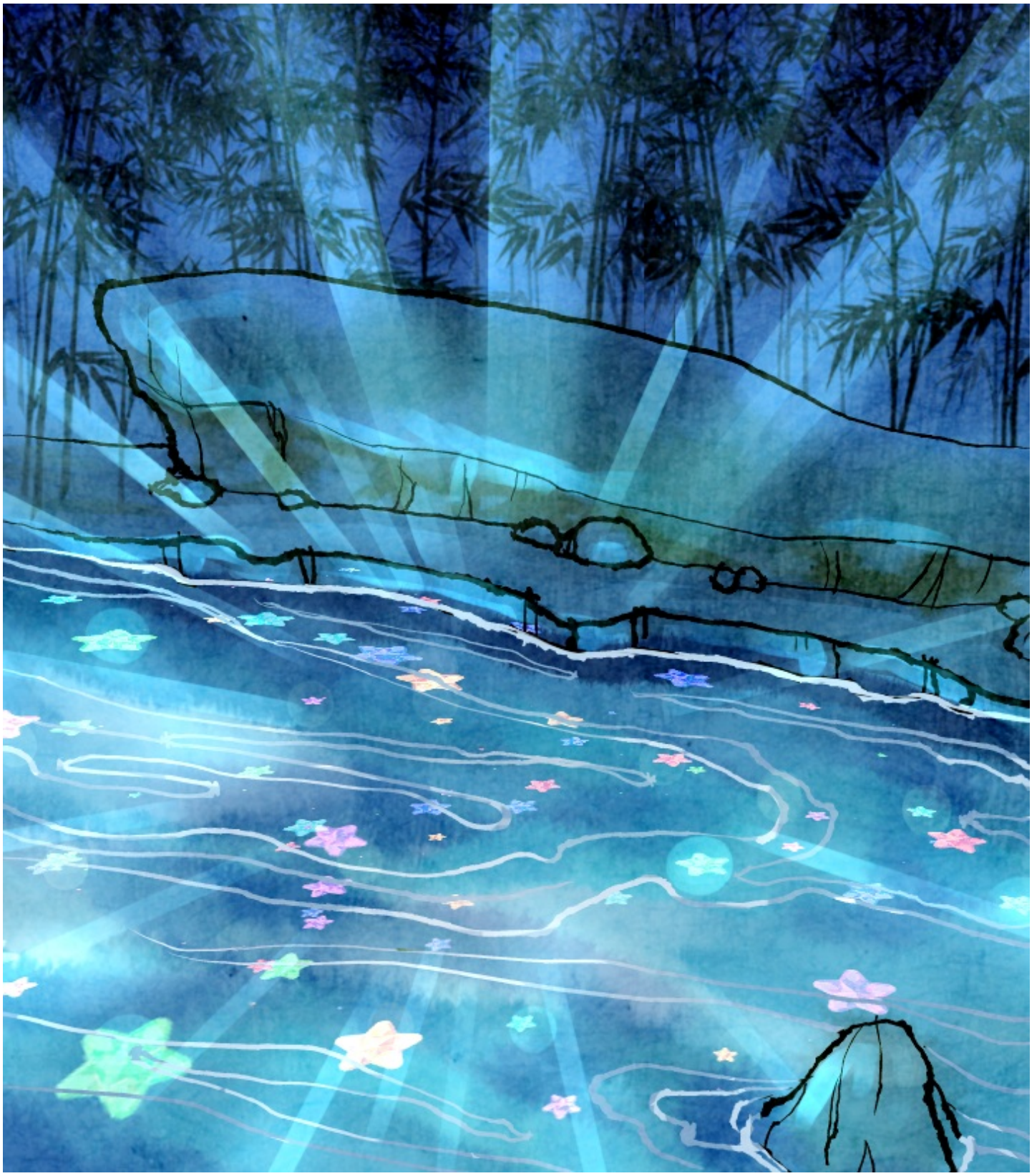
夜になり、天の川からお星さまがつくも川に降ってきました。

お星さまは、大きいものや小さいもの、

赤や黄色や水色のものなど、いろいろです。

お星さまは 「きらきら」 「ぴかぴか」 と宝石のように光りながら、

「ぽちゃん」 「どぼん」 と音をたてながら川に降ってきました。



しばらくすると、つくも川はお星さまでいっぱいになりました。

お星さまは川の中できらきら光って、とてもきれいでした。

つくも神の 「おちゃわんくん」 は、

同じつくも神の「おはしちゃん」 「しゃもじいさん」 と一緒に、

星祭りへでかけました。

おちゃわんくんは、早くお星さまを拾いたくて、かけだしていました。

三人はつくも川につきました。

『さぁ、お星さまを拾うよ。』

おちゃわんくんは、勢いよく川に飛び込んでいきました。

おはしちゃんも、しゃもじいさんも、川に入っていきました。

川の中にはたくさんのお星さまが落ちていましたが、

星祭りでは、一つだけしかお星さまを持って帰ることができない決まりになっていました。

『わたし、この赤いお星さまにするわ。』

おはしちゃんは、赤くきらきら光るお星さまを持って帰ることにしました。

『わしは、この緑色のお星さまにしようかの。』

しゃもじいさんは、緑色にぴかぴか光るお星さまを選びました。

おちゃわんくんは、まだ決まりません。

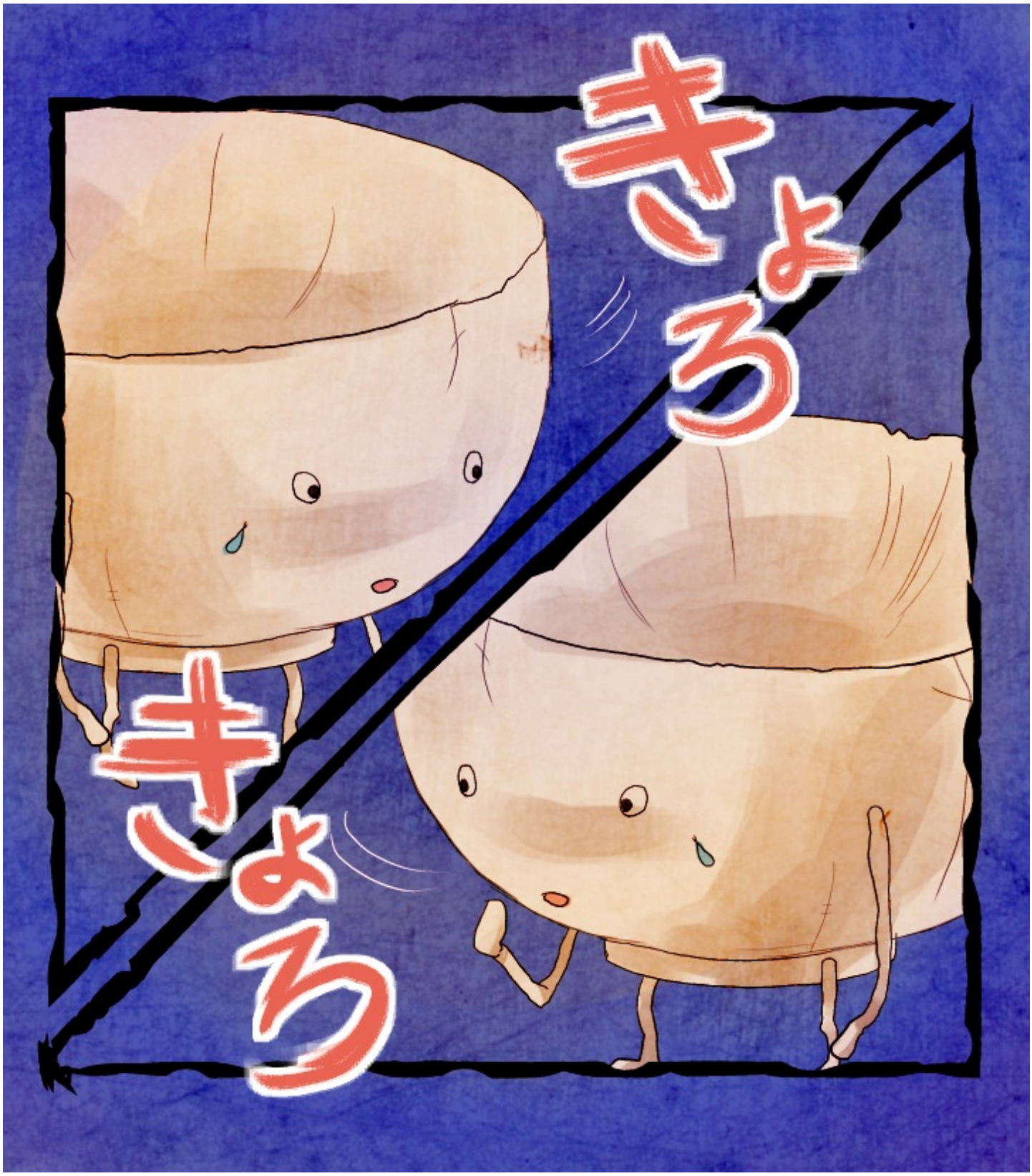
川からお星さまを拾っては、『うーん、うーん』　とまよっていました。

『ぼく、もうちょっと考えるから、先に帰っていいよ。』

おちゃわんくんは、おはしちゃんとしゃもじいさんに言いました。

おはしちゃんとしゃもじいさんは、拾ったお星さまを "一つづつ" 持って、

帰っていきました。



気がつくと、他のつくも神たちはみんな帰ってしまい、

つくも川には、もうおちゃわんくんだけしか残っていませんでした。

「きょろ　きょろ」「きょろ　きょろ」

おちゃわんくんは、胸が どきどき してきました。

『こんなにきれいなのに、一つだけしかお星さまを持って帰れないなんて・・・。』

『誰も見てないし、お星さまはいっぱいあるんだから、一つじゃなくてもいいよね・・・。』

おちゃわんくんは、＜お星さまは一つだけ＞という決まりを破ってしまいました。

『このお星さまは、きれいだな。』

『このお星さまは、大きいぞ。』

おちゃわんくんは、川から拾い上げたお星さまを

「ぽーん、ぽーん」 とおちゃわんの中へと、ほうり投げていきました。

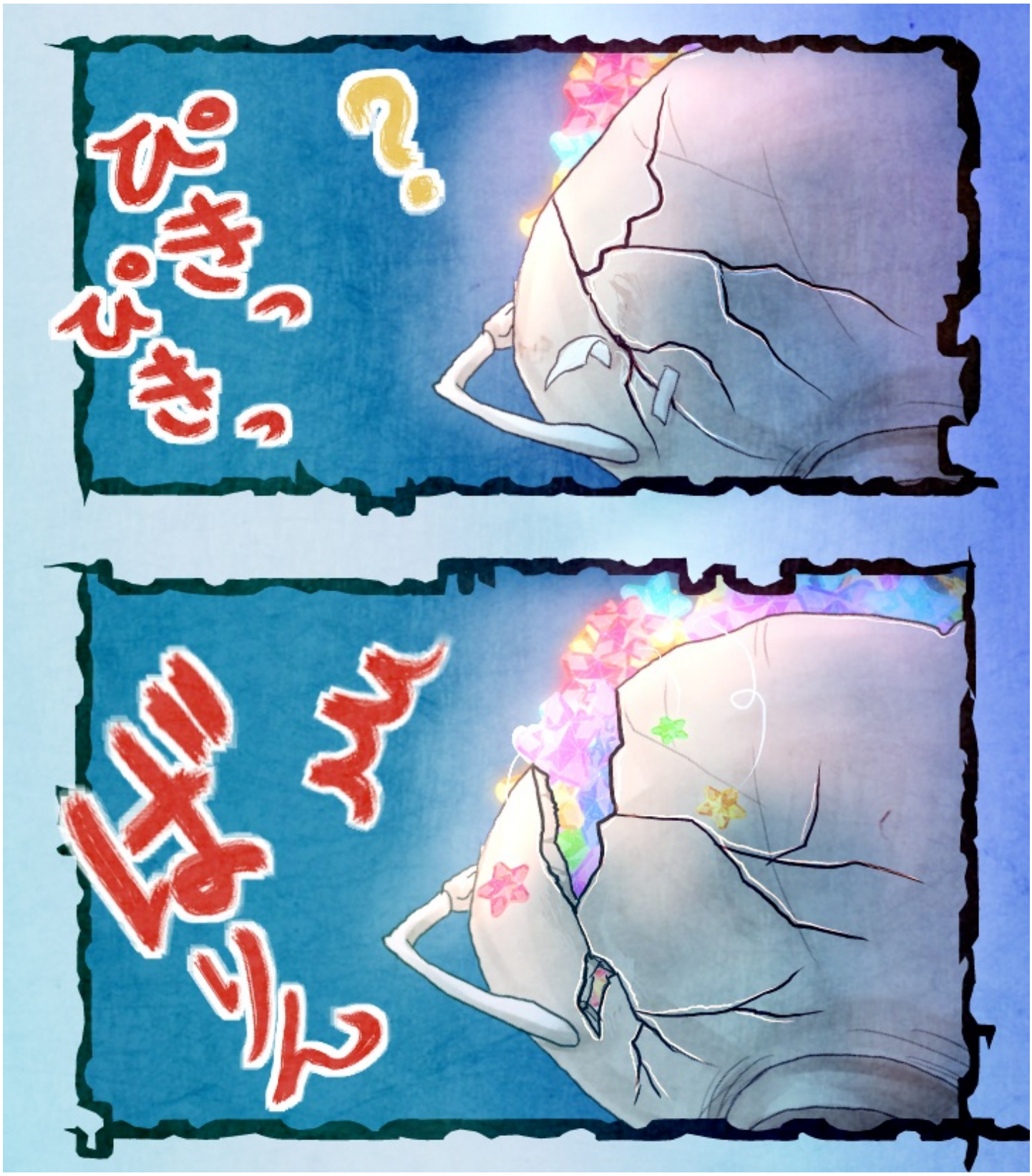
気がつくと、おちゃわんの中はお星さまでいっぱいになっていました。

いろんなお星さまを拾ったおちゃわんくんは、

やっと満足して帰ることにしました。

『よいしょ、よいしょ。』

おちゃわんの中は、お星さまがいっぱいでとても重くなっていました。



すると、どこからともなく、こんな音が聞こえてきました。

「ぴき　ぴき　ばりん」

「ぱき　ぱき　ばりん」

『なんの音だろう？　へんな音だな。』

おちゃわんくんは、この音がどこから聞こえてくるのか

分かりませんでした。

「ばり　ばり　がちゃーん！！」

突然、大きな音をたてておちゃわんくんの体が割れてしまいました。

せっかく拾ったお星さまも、ぽろぽろとこぼれ落ちてしまいました。

『ぼくの体、割れちゃったよ〜』

『お星さまも、ちらばっちゃったよ〜』

おちゃわんくんの目から、

ぽちょり ぽちょり と、涙が落ちてきました。

そうこうしているうちに、朝日がのぼりはじめました。

ちらばっているお星さまと、おちゃわんくんの体を朝日が照らしました。

お星さまは、いっそうきらきらと輝きながら、

溶けるように土の中に、消えていきました。

『ぼくも、ちゃんと決まりを守って、お星さまを一つだけ持って帰ればよかった・・・。』

おちゃわんくんは、すごく後悔しました。